古川遺跡６・７次調査　現地説明会資料

平成 22 年６月 26 日（土）10:30 ～ 12:00
財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

古川遺跡６・７次調査は、松山市が建設する都市計画道路北久米和泉線の整備に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査です。調査では、弥生時代の終わり頃（３世紀前半）に造られた周溝墓の一部と考えられる溝や古墳時代後期（６世紀）の溝、近世の溝や土坑などを発見しました。ここでは、調査で検出した遺構や遺物を紹介します。

所 在 地：〔古川遺跡６次調査〕松山市古川北二丁目 272 番３の一部　外
〔古川遺跡７次調査〕松山市古川北二丁目 271 番３の一部
調査期間：〔古川遺跡６次調査〕平成 22 年３月 16 日～平成 22 年６月 30 日
〔古川遺跡７次調査〕平成 22 年６月４日～平成 22 年６月 30 日
調査面積：〔古川遺跡６次調査〕370.54㎡
〔古川遺跡７次調査〕168.0㎡
調査主体：財団法人松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
調査担当：埋蔵文化財センター主任調査員　　水本 完児

１ はじめに

松山市埋蔵文化財センターは、都市計画道路北久米和泉線の整備に伴い数々の発掘調査を実施してきました。平成 13 年度から今年度までの 10 年間には東石井遺跡１次調査をはじめ西石井遺跡（１～３次調査）、古川遺跡（１～３・５次調査）など８件の発掘調査が実施され、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が数多く発見されています。弥生時代の中頃から古墳時代にかけては、東石井遺跡や西石井遺跡において竪穴住居や溝、井戸等が多数検出され、該期の大規模な集落の存在が明らかになりました。また、古川遺跡５次調査では弥生時代末に造られた周溝墓が１基確認されたほか、古川遺跡１次調査でも周溝墓の一部と思われる溝を検出しています。このほか、石井地区から古川地区全域においては、古代から中世の集落が点在する様子も次第にわかってきました。

２ 調査の概要

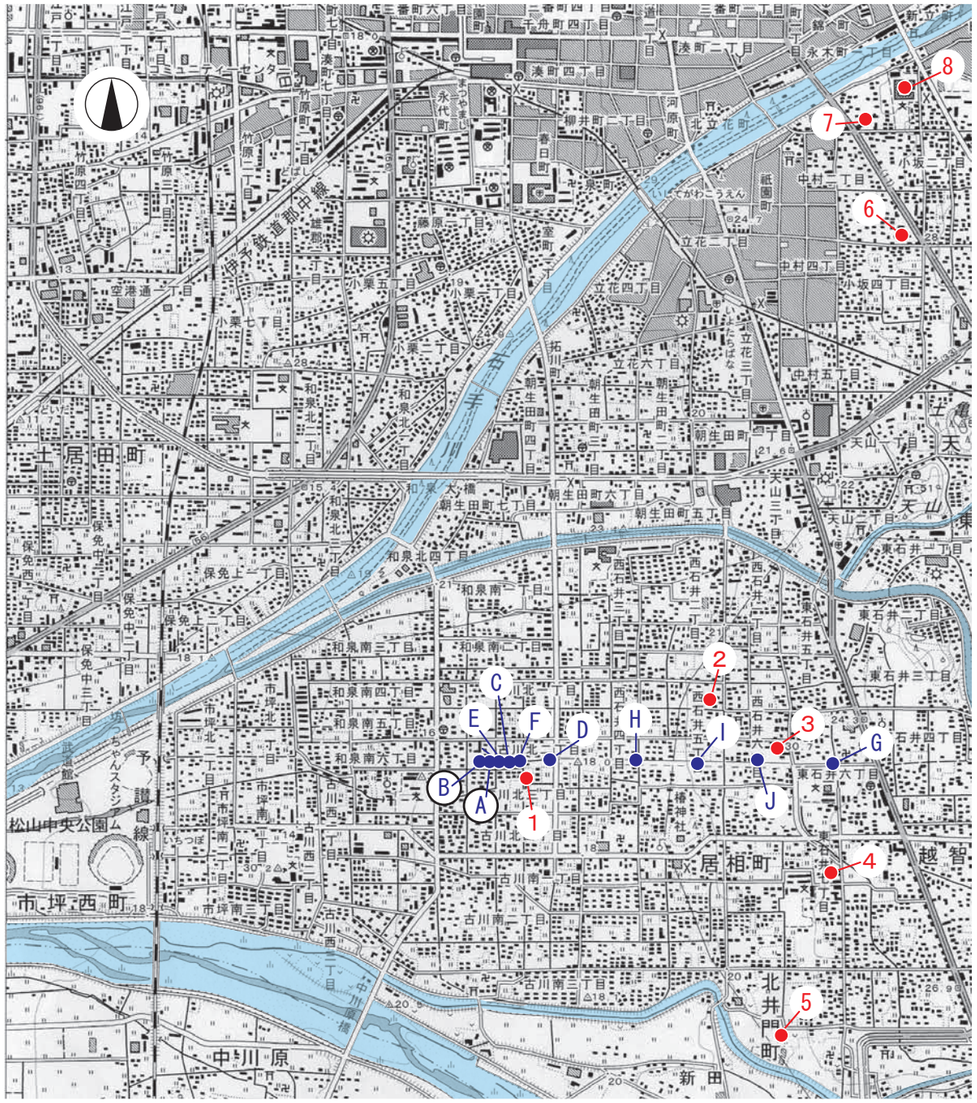
【検出遺構】

古川遺跡６次調査　　溝　：８条（弥生時代：５条、古墳時代：１条、近世：２条）
土坑：３基（近世）
柱穴：４基

古川遺跡７次調査　　溝　：２条（弥生時代）
土坑：１基（近世）

【出土遺物】

弥生土器（中期～末）、土師器（古墳～近世）、須恵器（古墳～古代）、陶磁器（中世～近世）
瓦（中世～近世）、石器

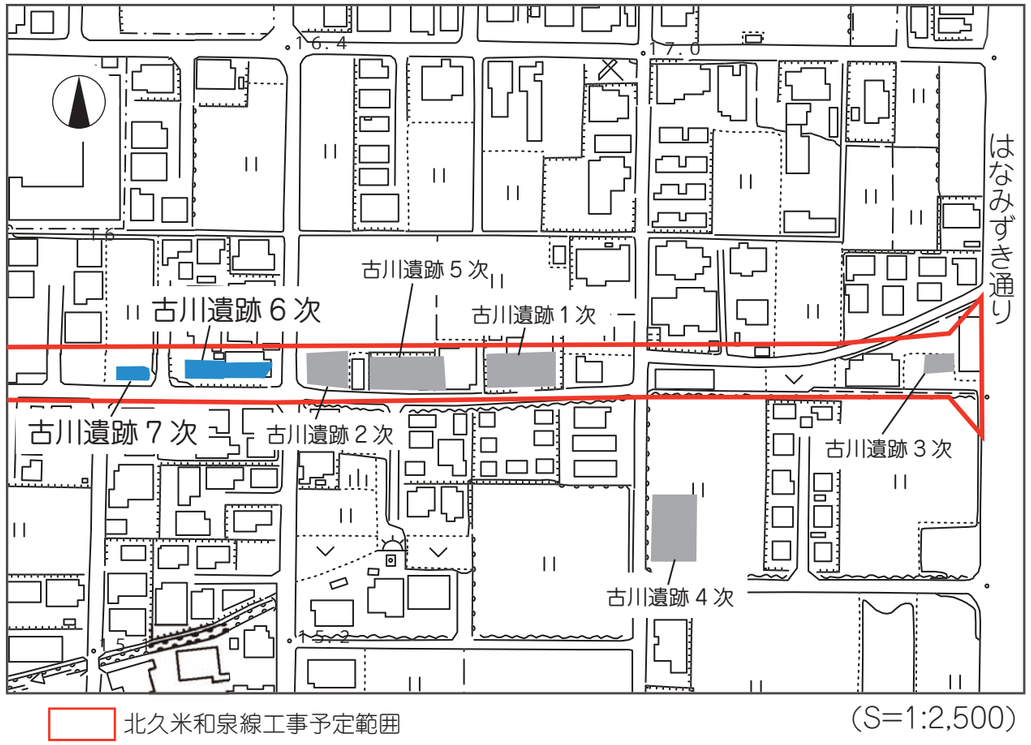


(S=1:25,000)

Ａ古川遺跡（６次）	Ｂ古川遺跡（７次）	Ｃ古川遺跡（５次）	Ｄ古川遺跡（３次）
Ｅ古川遺跡（２次）	Ｆ古川遺跡（１次）	Ｇ東石井遺跡（１次）	Ｈ西石井遺跡（１次）
Ｉ西石井遺跡（２次）	Ｊ西石井遺跡（３次）	１古川遺跡（４次）	２西石井荒神堂遺跡
３石井幼稚園遺跡	４南中学校構内遺跡	５北井門遺跡	６釜ノ口遺跡
７中村松田遺跡	８素鷲小学校構内遺跡		

※Ａ～Ｊ：北久米和泉線関連遺跡

第１図　北久米和泉線関連遺跡及び周辺主要遺跡分布図



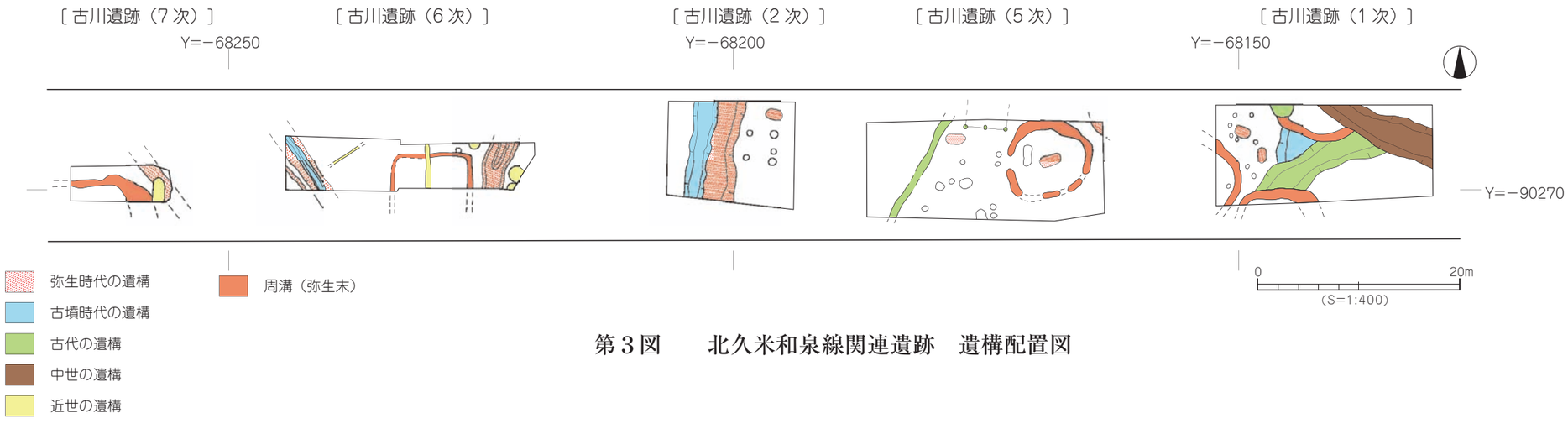
第２図　古川遺跡関連の調査地位置図

３　まとめ

調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物が見つかりました。弥生時代では６次調査において方形状に巡る溝 SD ４が検出され、同７次調査では「L」字状に折れ曲がる溝 SD10 が検出されました。両者は埋土や出土遺物の特徴が酷似しており、弥生時代の終わり頃に掘削された溝と思われます。なお、近隣の調査では周溝墓や周溝の一部と思われる溝が検出されており、溝の形状などから SD ４・10 は周溝墓に伴う溝の一部である可能性が高い遺構と考えられます。両溝の検出は、古川地区が弥生時代終わり頃には集団墓地を形成する地域であったことを裏付ける追加資料であり、墓域の範囲や構造を解明するうえで貴重な手がかりとなるものです。なお、今回の調査結果と既従の調査成果などから、当該期には石井地区から古川地区一帯は石井地区を居住域、古川地区を墓域とする明確な領域区分がなされた集落構造であったと推測されます。

古墳時代では６次調査において北西－南東方向の直線的に掘削された溝 SD ６が検出され、溝からは古墳時代後期、６世紀前半頃の須恵器片や土師器片が出土しました。また、両調査からは近世、江戸時代後期の溝や土坑が検出され、遺構内からは土師器片や陶磁器片が出土しています。これらの遺構や遺物は断片的ではありますが、古墳時代以降も古川地区に集落が営まれていたことを示す資料といえます。

今後は、古川地区の発掘調査を進めていくうえで周溝墓の構造や埋葬施設、さらには墓域の範囲確認をすることにより、古川地区だけでなく松山平野における弥生時代の墓制を明らかにし、弥生時代の集落様相や構造を詳細に解明することが重要課題といえるでしょう。



第３図　　北久米和泉線関連遺跡　遺構配置図

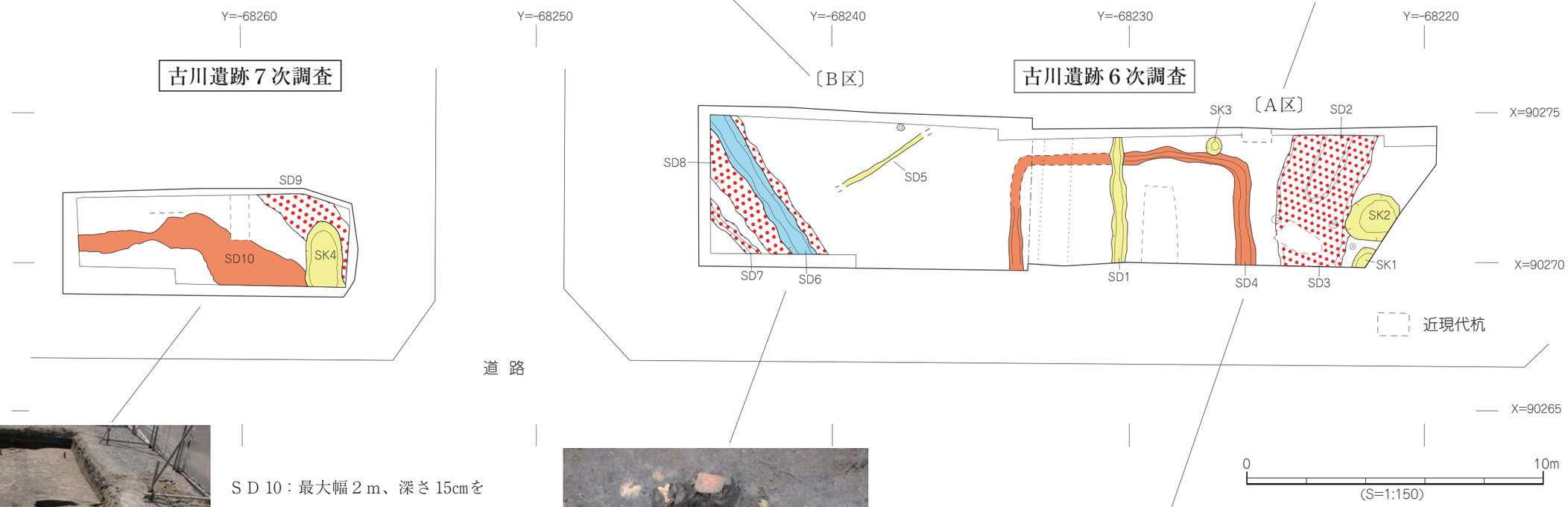
古川遺跡６・７次調査

【検出遺構】

弥生時代	溝	：７条〔ＳＤ２・３・４・７・８・９・10〕
古墳時代	溝	：１条〔ＳＤ６〕
近　　世	溝	：２条〔ＳＤ１・５〕
	土坑	：４基〔ＳＫ１・２・３・４〕

Ｂ区　完掘状況（東より）

Ａ区　完掘状況（西より）



遺構検出状況（東より）

ＳＤ10：最大幅２ｍ、深さ15cmを測る溝で、溝からは胴部にタタキ調整を施す弥生土器の甕や鉢の破片が少量出土しました。溝の形状や埋土、周辺の調査成果などから、SD10は周溝（墓）の一部である可能性の高い溝と考えられます〔弥生末〕。

ＳＤ６：幅60cm、深さ10cmを測る北東－南西方向へ直線的に延びる溝で、溝からは須恵器坏身（1/2の残存）や土師器片が出土しました〔古墳後期〕。

ＳＤ４：東西長８ｍ、南北検出長４ｍ、溝幅40～60cm、深さ５～10cmを測る方形状の溝で、溝は黒褐色土で埋没しています。埋葬施設は検出されませんでしたが、溝の形状より方形周溝墓の可能性が高い遺構です〔弥生末〕。

弥生時代の遺構
古墳時代の遺構
近世の遺構
周溝（弥生末）

第４図　遺構配置図

表１　北久米和泉線関連遺跡一覧

番号	遺跡名	調査年度	所在地	調査面積（㎡）	検出遺構	出土遺物
A	古川遺跡６次調査	H21	古川北二丁目 272 番３の一部外	370.54	溝８条 (弥生・古墳・近世)・土坑３基 (近世)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器
B	古川遺跡７次調査	H22	古川北二丁目 271 番３の一部	168.00	溝２条 (弥生)・土坑１基 (近世)	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器
C	古川遺跡５次調査	H21	古川北二丁目 275 番１の一部外	606.60	周溝墓１基 (弥生)・掘立１棟 (平安)・溝１条 (平安)・土坑４基 (弥生)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・石器
D	古川遺跡３次調査	H18	古川北二丁目 284-10・11 の各一部	55.00	自然流路１条 (弥生)	弥生土器・木
E	古川遺跡２次調査	H18	古川北二丁目 274 の一部	202.43	溝３条 (弥生)・土坑２基 (弥生)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器
F	古川遺跡１次調査	H18	古川北二丁目 277-3	307.28	周溝３条 (弥生)・溝２条 (古墳・平安)・土器棺墓１基 (弥生)・土坑３基 (平安)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦・石器
G	東石井遺跡１次調査	H13	東石井 527-1	4,800.00	竪穴２棟 (弥生)・掘立３棟 (古墳)・溝 22 条 (弥生～古代)・井戸４基 (弥生)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・石器・管玉
H	西石井遺跡１次調査	H13～H14	古川北二丁目 292 外	3,122.00	竪穴 11 棟 (弥生・古墳)・溝 19 条 (弥生～中世)・土坑 21 基 (弥生～中世)・井戸２基 (弥生)・土器棺墓２基 (弥生)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・石器・鉄器
I	西石井遺跡２次調査	H14	西石井 354　外	1,440.70	竪穴 13 棟 (弥生・古墳)・掘立１棟 (弥生)・溝９条 (弥生～古代)・土坑 25 基 (弥生～中世)・井戸６基 (弥生)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・鉄器・分銅形土製品
J	西石井遺跡３次調査	H15	西石井６丁目 200-11 外	1,239.00	竪穴２棟 (弥生)・掘立２棟 (古墳)・溝 26 条 (弥生～中世)・井戸５基 (弥生)・土器棺墓２基 (弥生)・土壙墓６基 (中世)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・鉄器・玉類

表２　石井・古川地区の遺跡一覧

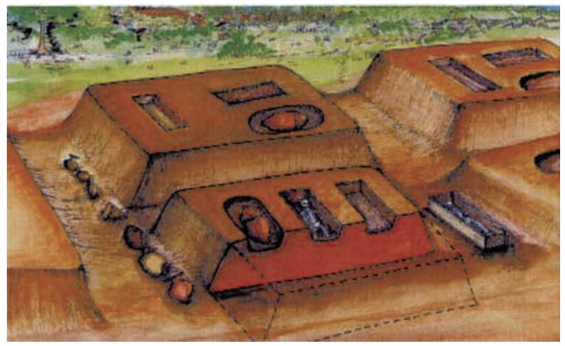
番号	遺跡名	調査年度	所在地	調査面積（㎡）	検出遺構	出土遺物
1	古川遺跡４次調査	H21	古川北三丁目 318-1 の一部	594.96	溝３条 (弥生・古墳)・自然流路１条 (弥生)	弥生土器・土師器・須恵器・木
2	西石井荒神堂遺跡	S51	西石井町 244 番１	300.00	竪穴１棟 (弥生)・土壙墓３基 (弥生)	弥生土器・石器
3	石井幼稚園遺跡	S60	西石井町９番地	430.00	竪穴１棟 (古墳)・溝１条 (平安)・土坑１基 (中世)・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・陶磁器
4	南中学校構内遺跡	S61	東石井町 670 番地	290.00	溝３条 (弥生)	弥生土器・石器

弥生時代の墓制

弥生時代の墓（埋葬施設）には、木製の棺（ひつぎ）をおさめた木棺墓（もっかんぼ）や、木製の棺の代わりに石製の棺をおさめた石棺墓（せっかんぼ）、壺や甕を棺として利用した土器棺墓（壺棺墓・甕棺墓）、穴の中に直接死者を埋葬した土壙墓（どこうぼ）などがあります。このような埋葬施設のまわりを溝（周溝）で囲んだものを周溝墓（しゅうこうぼ）と呼び、溝を方形状に巡らしたものを方形周溝墓、円形に巡らしたものを円形周溝墓といいます。しかし、方形周溝墓と円形周溝墓とでは、形態以外にどのような違いがあるのかについては明らかでありません。周溝墓は弥生時代前期末から古墳時代前期に、主として近畿地方以東で盛行しました。墓は数基あるいはそれが数群で形成され、連結したものや規則的な配置を示すものが多く、墓の造営は周溝を掘り、その掘り上げた土を盛り上げて高さ１m前後の小さなマウンドを築き、マウンド上に埋葬施設を造ります。周溝には一部途切れる箇所がみられるものがあり、これは陸橋部（りっきょうぶ）と呼ばれ死者を埋葬する際の通り路と考えられています。埋葬施設として一般的にみられるものは木棺墓です。しかも木棺墓は１基が単独であるものばかりでなく、複数の木棺墓がひとつの周溝墓内にあるものもよく見られます。このように、特定の人だけでなく、一つの周溝墓内に複数の人が埋葬されている場合には家族墓と考えられています。また、周溝は隣り合う周溝と同じ周溝を共有している場合もあります。

周溝内からは数多くの土器が出土しますが、これらの土器のなかには底部など土器の一部に穴をあけたものや、口縁（こうえん）などを意図的に打ち欠いたものがよくみられます。これらの土器は日常生活においては他用できないようにしたもので、死者を埋葬する際に周溝墓のマウンド上や周溝内に置かれたものと考えられています。

円形周溝墓



方形周溝墓埋葬状態の復原